

■エンディングフェイズ

※エンディングの描写はすべて、一例に過ぎない。アクト中の会話内容などを適宜反映した内容に変更すること。

●エンディング 1：果実の収穫

シーンプレイヤー：『④レッガー』

◆解説

『④レッガー』のエンディング。すみれとの相談を受け剛三との関係改善にアドバイスしていた場合は何かしら変化を入れてもいいだろう（ファストフードが手弁当に変化するなど）。

また、蜘蛛蜥蜴が生存している場合、一緒に仕事をする仲間として紹介される。《暴露》を止めていない場合、脅しのネタは羽釜の起こした崩落事故とそれに連なる猟奇殺人となる。

▼描写

数日後、昼間の新宿インベリアルパーク。数日前と同じ場所で、培養食品のファストフードを片手に、剛三は君を待ち受けていた。

▼セリフ：剛三

「何から何まですまねえな。まさかここまで大事なあ思わなかった」
「件の R シリーズってやつあ販売停止になった。製造過程に未認可の薬品が使われた、とかそういう話になってるな」
「こんだけ動き回らせて、あれだけの駄賃で済まそうあ思ってたねえぜ。なあ、暇なら一口乗らねえか？」
「実は R シリーズとやら、CFC が回収し出す前にこっちで買あさってたな」
「適当な値段で転がす気だったんだが、手前んとこで抑えてる情報と抱き合わせで大企業様にお買取り願おうと思ってよ」
「こちとら穩便に済ましてやるつもりだが、そう簡単にはいくめえよ。そこでお前の力が必要、ってなわけだ」
「いい儲けになるぜ。どうだい」

▼セリフ：蜘蛛蜥蜴

蜘蛛蜥蜴が生きている場合、剛三から“今回の仕事仲間”として紹介される。
「後金貰う約束だったんだが、フイになっちまった。お陰でちと入用でねえ。実入りのいい仕事をまわしてもらったのさ」
「安心しな、背中から襲うような真似はしないよ。蜘蛛蜥蜴は信条を曲げない」
「ま、そのうちやりあう機会もあるだろうし。リターンマッチはその時にさせてもらうぜ」

◆結末

こうして、君たちと CFC との“交渉”が始まった。それはやがて周囲を巻き込む大騒動へと発展するのだが、それはまた別のお話。

●エンディング 2A：約束の日まで

シーンプレイヤー：『②カブト』

◆解説

ルウが生きている場合のエンディング。《暴露》を防いでいない場合、ルウが去っていった事を告げられる。

▼描写

あれから数日。君は復学したすみれを学校へ送っている。すっかり明るさを取り戻した彼女が、あなたに話しかけてきた。

▼セリフ：すみれ

「まさか、ルウにまた会えるとは思いませんでした。本当にありがとう」
「ルウ、もうすぐ退院できるって。お医者さんがびっくりしてました」
「でも、それはそれとして。契約は 1 週間だったんですから、ちゃんと私を守ってくださいね」

「学校の中まで来いとはいいませんよ。それはそれで面白そうではありますけど」

『②カブト』先生、なんて。案外、ボディガードより似合ってるんじゃないですか？」

◆結末

「じゃあ、また夕方。約束ですよ」
彼女は校門へ向かい駆け足で走っていった。クラスメイトなのだろうか、すみれに気づいた少女が何人か『②カブト』の方を指さして何かを言っている。
依頼主へ定期報告を行い、君はひとまず休憩することにした。
復学したルウの騒動に巻き込まれ、君が本意ながら学校内に潜入することになるのは、これより少しだけ後の話になる。

●エンディング 2B：恐怖の克服者

シーンプレイヤー：『②カブト』

◆解説

ルウが死んでいる場合のエンディング。
数日後、すみれを学校へ送る途中の会話。

▼描写

あれから数日。学校に行く、と言い出したすみれを、君は学校へ送ることにした。

▼セリフ：すみれ

「ルウのお墓はこっちに作ってもらいました。リエさんが、そうするのがいい、って言うてくれて」
「ありがとう、ルウを見つけてくれて。ようやく、あの事故から帰ってこれた。今はそんな気持ちです」
「色々な事があったけど。ルウが私を助けようとしてくれた。その事だけは、嘘じゃないってわかったから」
「だから、ここから前に進むために。『②カブト』さん、私に勇気をくれませんか」
「ありがとう。もう・・・怖くないです」

◆結末

「それでは、お元気で。私はもう、1 人でも大丈夫です」
彼女は校門へ向かい歩いていく。クラスメイトなのだろうか、すみれに気づいた少女が彼女に声をかけているのが見える。気付けばルークからのメール着信。次の仕事が決まったらしい。君はまだ見ぬ依頼人の恐怖を打ち払うべく、次の仕事に赴くのだった。

●エンディング 3：最高の情報屋

シーンプレイヤー：『③ニューロ』

◆解説

『③ニューロ』のエンディング。ミシェイラと会話を行う。（《暴露》を妨害した状況を想定している。《暴露》の成否にかかわらず、彼女は次の獲物を探すため展開そのものは大きく変わらないだろう。既にミシェイラが死亡している場合、適当な前置きをしたらうえてビデオレターの形で【殺す】を選択した際の描写を読み上げること。）

▼描写

あれから数日がたったある日。場所はスラム、深夜の中華街。路地裏で君はミシェイラに偶然再会した。

▼セリフ：ミシェイラ

「やあ、こんなところで。奇遇だね、情報屋」
「いやはや、なんとも残念な結果だ」
「画期的な食用人種の公表は羽釜氏の遺志だった。その思いすら摘み取ってしまうのは、残酷な話だと思わないかな？」
「まあ、結果はどうあれ、君は私が知る中では最高の情報屋だったよ。ありがとう」

【ルウが生きており、《暴露》を防いだ場合】

「ところで。件の生き残りの彼女は、またルウとお友達ごっこを続けているのかな？」

「彼女はルウの事を『おいしそう』だと思ったのだろう？」

「そんな彼女が、いつまでもルウの事を友達として見る事が出来とは思えないね」

「私がトリガーを引くまでもなく、きっと彼女達は破滅する。その日を楽しみにしているといい」

◆結末

「さて、次に向かって動くでしょう。なんせ今回はタダ働き・・・どころか完全な赤字だ」

「“クライムトリガー”は次の引き鉄を探すとしようか」

周囲は雑多な喧噪に包まれており、近くに人の気配はない。ミシェイラはエキストラである。宣言のみで殺すことができる。

【関係ない、放っておく】

「そうかい。ではきっと、また会うことになるだろう」

「また依頼をさせてもらうよ」（残っているなら《プリーズ！》を使用する）

「言っだろう。君は私にとっての、最高の情報屋だ、とね」

厄介な事に、彼女に気に入られてしまったようだ。君とクライムトリガーとの戦いの物語は、ここから始まることとなる。

【殺す】

「難儀な話だね、本当に。・・・ああ、そうさ。こうでもしないと、私は止まらない」

「さて、最後にいいことを教えよう。私が死ぬ事で発動する、最後のクライムトリガーの話だ」

「そいつはきっと、誰に気づかれるともなく、この世界を終わらせるだろう」

「君なら、きっと、たどり着く。信じているよ、情報屋」（残っているなら《プリーズ！》を使用する）

最期のトリガーは引かれてしまった。君だけが知っている破滅を防ぐため、君は文字通り世界を救う戦いへと赴くのだった。

【「止める」などの意思を口にする】

「ああ、きっとできる。君ならたどり着いてしまうのだろうね」

「でも。私はトリガーを引き続ける」

「君は、止め続けることができるかな？」（残っているなら《プリーズ！》を使用する）

これが、君とクライムトリガーとの戦いの始まりだった。

●エンディング 4A：翼をください

シーンプレイヤー：『①フェイト』

◆解説

リエの《霧散》が残っていた（リサーチ 6 で消費していない）場合のエンディング。数日後、時間は昼間。探偵事務所、または自宅を想定している。ルウが死亡している場合、弔いが済んだ事を告げる。生き残っていても《暴露》を止めていない場合は、既に故郷へ帰ったことを話す。会話の内容は、遠い将来の過程の話となるだろう。

▼描写

事件の資料をまとめた後、というたた寝をしていた君は、物音に気づき窓の方を見た。窓の外にはリエが張り付いており、窓を蹴り破る姿勢のまま君と視線があった。

▼セリフ：リエ

「・・・それはともかく。ルウを見つけてくれた事、感謝する。本当に探偵というのはすごいのだな」

「ルウはまた学校に通いたいといっている。ルウが望むなら、私は止めない」

「すみれも、いい奴だった。少し不安だが、任せることにする」

「ひとつ、聞いてもいいだろうか」

「私たちは、人間と一緒にいていいのだろうか」

「そうか。お前がそういうなら、きっとそうなんだろう」

「お前はすごい探偵だから。わからない事なんて、きっとない」

◆結末

「本当にありがとう。ルウを、私を助けてくれて。いずれ、この恩は返させてもらう」

「だから、もう少し見ていくとしよう」

「この街は面白いな。私の知らない事ばかりだ」

言うが早いか、彼女は窓から飛び出していった。推理するまでもなく、彼女はきっとトラブルを引き起こすだろう。今、それを未然に防げる人物は、残念ながら心当たりは1人しかいない。

窓の外に見える空には雲一つなく。翼があれば、どこまでも飛んでいきたくなるような、きれいな青空が広がっていた。

●エンディング 4B：勇気一つを友にして

シーンプレイヤー：『①フェイト』

◆解説

リエの《霧散》が残っていなかった（リサーチ 6 で消費した）場合のエンディング。クライマックス直後、時間は夜明け前。探偵事務所、または自宅を想定している。ルウが死亡している場合、弔いが済んだ事を告げる。生き残っていても《暴露》を止めていない場合は、既に故郷へ帰ったことを話す。会話の内容は、遠い将来の過程の話となるだろう。

シーン終了後、リエは死亡する。死亡ダメージを打ち消せる神業が残っていれば、このシーン中に使用することでリエを救う事ができる。その場合、シーンの描写を適宜変更するといいたいだろう。

▼描写

仮眠を取っていた君は、夜風が当たる感触に目を覚ます。見ると、開いた窓にリエが腰かけて君の方を見ていた。そういえば、鍵をかけ忘れていた気がする。

▼セリフ：リエ

「すまない、こんな時間に」

「ルウを見つけてくれた事、感謝する。本当に探偵というのはすごいのだな」

「ルウはまた学校に通いたいといっている。ルウが望むなら、私は止めない」

「すみれも、いい奴だった。少し不安だが、任せることにする」

「感謝する。ルウを、私を助けてくれた事。きちんと恩を返したかったが、私はもう、“還る”時間だ」

「ひとつ、聞いてもいいだろうか」

「私たちは、人間と一緒にいていいのだろうか」

「そうか。お前がそういうなら、きっとそうなんだろう」

「お前はすごい探偵だから。お前がわからない事なんて、きっとない」

◆結末

「ありがとう。最期にお前と話をできてよかった」

言うが早いか、彼女は窓から飛び出していった。血痕のついた数枚の羽根が、窓枠の近くに落ちている。

やがて空の色は変わり、朝日の輝きが街を照らし始めた。それは、翼があれば、そこに飛んでいきたくなるような、美しい輝きに見えた。